

DREAM AND
HOPE, 2025

いま中学生が
訴えたいこと



夢と希望と

令和7年度 少年の主張愛知県大会 発表文集

令和7年度 少年の主張愛知県大会

主催／愛知県・愛知県青少年育成県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構
共催／愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会 後援／愛知県私学協会



主催／愛知県、愛知県青少年育成県民会議、独立行政法人国立青少年教育振興機構
共催／愛知県教育委員会、名古屋市、名古屋市教育委員会
後援／愛知県私学協会

は じ め に

少年の主張愛知県大会は、中学校、義務教育学校、特別支援学校中学部及び各種学校に在学する生徒が、日頃の生活を通じて考えていることや実践していることなどを、意見や提言にまとめて発表することにより、思考力・判断力・表現力を高め、自主性や社会性を培うとともに、県民の皆様、青少年の健全育成に対する理解を深めてもらうことを目的として開催しています。

この大会は、国際児童年を記念して、1979年から始められたもので、本年度で47回目を迎えました。今回は、県内240の中学校から33,831名という多くの生徒の応募があり、その中から学校選考、地区ブロック審査を経て選ばれた代表者14名に、8月20日に名古屋市中区役所ホールで開催された県大会において、それぞれの主張を発表していただきました。

また、この大会で最優秀賞を受賞された松永高志さん（西尾市立鶴城中学校3年）は、11月16日に東京都の国立オリンピック記念青少年総合センターで開催された全国大会において、努力賞を受賞されました。

県大会の開催にあたっては、県内の各学校、市町村教育委員会、審査委員、県教育委員会等、多くの方々の御協力とお力添えをいただきました。特に、開催地である名古屋市の皆様には、運営等について多大なる御協力をいただきました。また、名古屋市内の中学生5名に「共感！」ジュニア選考委員を務めていただくとともに、名古屋市立津賀田中学校和楽器部、名古屋市立楠中学校和楽器部によるアトラクションを披露していただきました。ここに改めて心から感謝申し上げます。

この度、この大会で発表された14名の主張を取りまとめました。この冊子が、青少年育成関係者を始め、県民の多くの方々の参考となり、青少年健全育成の一助となることを願っています。

2026年1月

愛 知 県 知 事

大 村 秀 章

愛知県青少年育成県民会議会長

永 井 淳

令和7年度少年の主張愛知県大会

開会式



主催者挨拶
愛知県知事 大村 秀章

主張発表



名古屋市立津賀田中学校和楽器部



名古屋市立楠中学校和楽器部



令和7年度 少年の主張愛知県大会

主 催 / 愛知県・愛知県青少年育成県民会議・独立行政法人国立青少年教育振興機構
共 催 / 愛知県教育委員会・名古屋市・名古屋市教育委員会 後 援 / 愛知県私学協会



表彰式

ジュニア選考委員



「第47回 少年の主張全国大会 ～わたしの主張2025～」

愛知県大会最優秀賞の松永高志さん（西尾市立鶴城中学校3年）は、11月16日（日）に国立オリンピック記念青少年総合センター（東京都）で開催された第47回少年の主張全国大会において、努力賞を受賞しました。



目次

大会発表者の作品

最優秀賞 ヒーロー	まつ 松	なが 永	たか 高	し 志	西尾市立鶴城中学校3年	1
優秀賞 「ちがい」 がつないだ心	すず 鈴	き 木	さき 咲	な 菜	愛知教育大学附属岡崎中学校3年	2
優秀賞 言葉の壁を乗り越えて	ビ	ン	ハ	ナ	豊田市立竜神中学校3年	3
優秀賞 思いを繋ぐヘッドネーション	よし 芳	の 野	れ 令	な 奈	小牧市立桃陵中学校3年	4
優秀賞 繊細と言う名の才能 共感賞 -短所は長所の裏返し	こん 近	どう 藤	あま 天	ね 音	大府市立大府西中学校3年	5
奨励賞 唯一無二の恩	いし 石	かわ 川	ま 真	あい 愛	名古屋市立新郊中学校3年	6
奨励賞 「私たちが未来のためにできること」	かわ 河	い 合	ゆず 柚	な 奈	豊田市立旭中学校3年	7
奨励賞 多様性とわたし	かわ 川	むら 村	ち 知	え 慧	新城市立新城中学校3年	8
奨励賞 心の声を聴く	すず 鈴	き 木	る 瑠	しん 心	田原市立東部中学校3年	9
奨励賞 違いを知り、誇りを持ち、未来を歩む	た 田	なか 中	さ 紗	ら 来	稲沢市立稲沢西中学校3年	10
奨励賞 共に生きる社会	だん 段	した 下	けい 慶	しろう 士郎	岡崎市立六ツ美中学校3年	11
奨励賞 幸せの正体	まつ 松	おか 岡	さ 咲	くら 花	豊山町立豊山中学校3年	12
奨励賞 世界はうつくしいと	やま 山	だ 田	えみ 笑	り 里	蟹江町立蟹江中学校3年	13
奨励賞 「普通」だらけの日本で	やま 山	だ 田	ひ 陽	まり 葵	豊川市立御津中学校3年	14

講評	15
----	----

募集及び審査の経過と結果	16
--------------	----

<参考>

「第47回少年の主張全国大会 ～わたしの主張 2025～」 内閣総理大臣賞受賞作品

伝える

谷口鉄馬

(鳥取県) 鳥取市立桜ヶ丘中学校3年 23

大会発表者の作品

(原文のまま掲載しました。)



最優秀賞（愛知県知事賞）

ヒーロー

西尾市立鶴城^{つるしろ}中学校 3年

中学校に入学すると、「将来、になりたい姿は何か」と聞かれることが多くなった。そのたびに、僕は「優しい人」と答え、本当の気持ちを封印するようになった。

僕が本当になりたい姿、それはヒーローだ。幼い頃、ヒーローが悪と戦い、世界を救うカッコよさにあこがれた。その夢は年とともに変化しながら、僕の中に存在し続けた。

僕は今まで中国、タイ、フィリピン、インドに訪れたことがある。特に、小学六年の一年間を過ごしたインドでは衝撃を受けた。僕が過ごしていた都会から、さほど遠くない場所にストリートチルドレンやブルーシートの家で暮らす人々がいたのだ。日本や他の国では感じることのなかった貧困を肌で感じ、夢は弱い人たちや困っている人たちを助ける人になりたいという強い思いへと成長していた。

それなのに、中学生になると、「ヒーローになりたい」と言うと、子供みたいと笑われて恥ずかしいから、「優しい人」と無難な言い方をした。本当は、夢の大きさに向き合いきれず、自分から無理だと逃げていたのだ。

ところが、中学三年生の四月、そんな僕の心を揺さぶる出来事があった。塾の帰り道、いつも通り自転車をこいでいたときだった。ガンという衝撃と同時にアスファルトに顔から突っ込んだ。急な出来事で自分に何が起きたのか分からなかった。頭や手のヒリヒリとした感覚。口に広がる鉄のような血の味。ようやく前輪が石に乗り上げて転んだのだと理解した。歯は折れて、変な方向に傾いていた。自転車は車輪が大きく曲がって動かず、持ち上げたくても力が入らない。どうしたらいいのかと、僕は途方に暮れた。そのとき、「大丈夫？」

二人のお兄さんが声をかけてくれた。一人は金髪で黄色の眼鏡、もう一人はタバコを吸っていた。近づいてきた二人が、僕はただただ怖かった。二人の外見が「悪い人」をイメージさせたからだ。このまま絡まれてしまうのかと、ドキドキして冷や汗が出てきた。

でも、その不安な気持ちはすぐに消えた。二人は僕の話聞いて、すぐに自転車を移動し、スマホを貸してくれて、親に連絡をさせてくれた。貧

まつ なが たか し
松 永 高 志

血で倒れそうになった僕を近くのベンチまで運び、ずっと付き添ってくれた。

「こんな遅くまで勉強してすごいじゃん。俺らそんな頭良くねえから。本当、尊敬だわ。」

緊張がほぐれるように明るい口調で話をしてくれ、勉強や将来の話になったときは、

「今の自分では志望校に合格できないかも。」

と、僕が自信なく言うと、彼らは、

「君ならできるよ。塾行ってがんばってるじゃん。応援するよ。」

と、言ってくれた。その後、親が来てくれたので彼らにお礼を言って、そのまま別れた。

今、思い出しても、彼らは間違いなく本物のヒーローだった。困っている僕を見て見ぬふりすることなく助けてくれた。痛む身体だけでなく、進路に悩む気持ちにも寄り添い、優しく励ましてくれた。僕を救い、勇気づけるだけでなく、人を見た目だけで判断してはいけないことにも気づかせてくれた。

二人への感謝の気持ちとともに、僕もヒーローになりたいという夢がよみがえってきた。誰が困っていても、ためらいなく動ける優しさや強さ、その場でできる精いっぱい行動をする誠実なヒーローに。

また、そのとき、僕は二人から受け取った思いを次の誰かにつなげていきたいとも考えた。すると、僕だけがヒーローでなくてもいいということに気づいた。僕と同じように、その人が誰かにもらった優しさや励ましを次の誰かに贈ることができたら、その人は誰かにとってのヒーローになれる。それは連鎖となって、次へ次へとつながっていくはず。そうやって、誰もがヒーローになれば、優しさがあふれる温かい世界が作っていけると思う。

今、ヒーローになりたい僕にできることは「国連で働く」という夢に本気で挑戦することだ。インドでの生活で目の当たりにした、幼い子が自分のおかれた現状も理解しないままに当たり前のように働いたり、物乞いをしたりすることのない世の中にしたい。生まれた時から人生が決まることのない、格差のない平等な社会にしたい。二人のお兄さんの応援に応え、自分なりにありがとうと伝えるためにも、僕は彼らを超えるヒーローになる。



優秀賞（愛知県議会議長賞）

「ちがい」がつないだ心

愛知教育大学附属岡崎中学校 3年 おかざき

すず き さき な
鈴 木 咲 菜

「言葉が通じなければ、気持ちは伝わらず、心も通じ合えない。」

昔の私は、人と人との関係は言葉に支えられて、成立するものだと、心のどこかで信じ込んでいました。けれど、言葉を超えて人と人がつながる心のあたたかさを今は知っています。

小学校五年生の春、私のクラスにペルーから女の子が転校してきました。誰とも目を合わさず、静かに席につく姿に、教室がずっと静かになったのを今でも覚えています。まだ日本語が話せず、話す言葉が違う彼女は、いつも、自分の席でノートを見つめていました。私は「話しかけたい」と思いつつも、遠くから見つめることしかできませんでした。

給食の時間。配膳係だった私は、彼女が列に並んでいることに気づきました。おぼんの持ち方、受け取り方、何も分からずに困っている彼女の様子を見て、「ここに置くんだよ」「次はこっち」と、身ぶり手ぶりを交えて説明しました。彼女は、少し戸惑いながらも、私の動きを真似してくれました。小さな声で、「アリガト。」と言ってくれた瞬間、私の胸の中に何かが灯った気がしました。

その日から、私は彼女に話しかけるようになりました。翻訳アプリを使ったり、身ぶり手ぶりで伝えたり、「うまく話せないから無理」ではなく、「伝えたいから工夫する」ようになりました。ペルーや日本について教え合ったり、笑い合いながら、言葉の壁を乗り越え、心でつながり、友だちになっていきました。

ところが、小学六年のクラス替えで、私たちは違うクラスになりました。廊下で手を振ることはあっても、月日が経つにつれて、私たちの距離も自然と離れていきました。

卒業が近づいてきたある日、校長先生に「学校の近くの日本語教室に行っておいで」と言われました。理由は聞かされませんでした。気になって行くことにしました。

日本語教室の壁に、そこに通う子たちが書いたであろう習字の作品が貼られていました。その中に、一際目を引く作品がありました。「咲菜」私

の名前が、漢字で、力強く書かれていたのです。左下には、彼女の名前もありました。日本語を覚えるのが大変だった彼女が、私の名前を、漢字で、気持ちを込めて書いてくれた。私の中に、給食の出来事、笑い合った日々、そして関わりが減った寂しさが、よみがえってきました。

そして翌日、学校で声をかけました。

「昨日、日本語教室の習字を見たよ。どうして、私の名前を書いたの。」彼女は少し照れたように笑い、教えてくれました。「テーマ、たいせつなもの。だから咲菜。」その言葉を聞いた瞬間、胸の奥がじんわりと熱くなりました。

「なんで、私だったの。」

彼女は私の目をまっすぐ見つめ、こう言いました。

「最初。給食教えてくれた。嬉しかった。ありがとう。」

彼女の口から出るたどたどしい日本語が、私の心にまっすぐに届きました。

「名前の漢字、難しい。でも、たくさん練習した。」

私は言葉を失いました。涙が出そうでした。私にとってはほんの一瞬の小さな出来事。でも、彼女にとっては、知らない国の教室で、困っている自分に気づいてくれたことが、たった一つの光だったのかもしれません。そのことを強く実感させられました。

中学生になり、私は文化や国籍、見た目、言語の違いから、誤解や孤立が生まれる現実を知りました。しかし、私は、「違い」は恐れるものではなく、理解し合うための入口だと思います。そして、小さな行動が誰かの不安を照らし、希望の光になるのだと思います。

私は「違い」を尊重し、心でつながれる世界を、つくっていきたいです。彼女が書いてくれた「咲菜」という文字は、私たちが出会い、心を交わし合った「証」です。

あの一枚の習字が、私にとっての証になったように、私自身も、誰かの心に残る証を刻める人になりたいと思っています。



優秀賞（名古屋市教育委員会賞）

言葉の壁を乗り越えて

豊田^{りゅうじん}市立竜神中学校 3年

「仲間外れにしないで。」

家族四人で夕食を食べていたときに、母が突然ベトナム語で言いました。

私の両親は共にベトナム人です。父は日本の大学を卒業し、日本語能力試験一級を取得しているので日本語での会話には困りません。しかし母は違います。母は父と結婚した後に日本に来ました。父に日本語を教わった母は簡単な日常会話しかできません。ですが明るい人柄の母は言葉の壁も気にしないので、日々の生活の中で困ることはありませんでした。

私が日本語を勉強し始めたのは四歳の頃です。こども園に入園するために日本語の勉強を始めました。それまでは全く話せなかったのですが、父が毎日教えてくれたので単語はどんどん覚えることができました。しかし、単語を知っているだけでは会話はうまくできません。私はほとんど日本語が話せない状態でこども園に入園しました。

こども園では友達をたくさん作りたいかったのですが、やはり言葉の壁が大きかったです。なかなか友達の輪に入ることができず、寂しい思いをしました。いちばん辛かったことは、周りの人たちが自分の理解できない言葉で会話しているのを聞くことでした。先生が翻訳機を使ってくれたのですが、気を遣われるのが嫌でしたし、何より先生に申し訳ないと幼いながらも思っていました。だから私は、より一層日本語の勉強を頑張るようになりました。そのおかげで日本語が少しずつ話せるようになり、友達とも仲良くできるようになりました。そして今では全く問題なく日本語を使って生活できています。今の私は、学校では日本語を話し、家ではベトナム語を使います。三歳年下の弟はベトナム語が苦手なので、弟と話をするときは日本語を使います。

中学校二年生になったある日、いつもと同じように家族四人で夕食を食べていました。私と弟と父は、あるニュースの話題について日本語で盛り上がっていました。母は会話に入ろうと、「何について話しているの。」と何度も聞いてきます。話が盛り上がっているときにわざわざ通訳することが面倒だった私は、

ビ　ン　ハ　ナ

「あとで教えるから。」と冷たく返してしまいました。でも母にとっては、それはとても辛いことだったのです。

「仲間外れにしないで。」母は突然ベトナム語で大声で言いました。その瞬間、私たちはすごく驚き、みんな黙ってしまいました。食卓には気まずい雰囲気が流れ、私はこの雰囲気から一刻も早く抜け出たくて、急いで夕食を食べ、逃げるように自分の部屋に駆け込みました。自分の部屋に戻った私は、こども園の頃の自分を思い出しました。自分の理解できない言葉で会話されることがどれだけ辛いことか、私がいちばん分かっているはずなのに、なんであんな言い方をしてしまったのだろう……。私は母に冷たく言ってしまったことを心から後悔しました。それは父も弟も、そして母も同じでした。家族四人で過ごせるのは夕食の時間だけです。だから次の日私たちは、夕食のときはみんながわかる言葉で楽しく会話をしようと、四人で決めました。

この日から私たち家族四人は、日本語とベトナム語の二か国語を使って会話をしています。弟が母にベトナム語で話しかけたり、母も知っている日本語を使ったりすることもあります。私自身も、ベトナム語がわからないときは父に教えてもらいます。それまでの私は、いちいち通訳することは面倒だし、正しい文法が使えているのかばかりが気になっていました。でも家族で話しているうちに、楽しく会話ができればそれでいいんだと思えるようになりました。なにより楽しそうに話をする母の顔を見るのがうれしいのです。

今世界はグローバル化が進み、日本にいても様々な国の人と接することが増えています。コミュニケーションをとる上で言葉の違いは大きな壁ではありますが、大切なのは、この人と話したい、聞いてもらいたいという気持ちで会話を楽しむことではないでしょうか。自分とは違う言語、文化、考え方の人たちを敬遠するのではなく、互いに理解しようと寄り添うことで無意味な争いが減り、世界はもっとつながり、新しい価値が生まれていくものだと思います。そんな大切なことを教えてくれた母に、私は今とても感謝しています。



優秀賞（愛知県教育委員会賞）

思いを繋ぐヘアドネーション

とよりょう
小牧市立桃陵中学校 3年

よしのれな
芳野 奈

「ヘアドネーションって何？」クラスメイトとの会話で出てきたこの言葉に私は衝撃を受けた。それは中学生になって初めて出会ったクラスメイト達に私がロングヘアである理由を聞かれた時のことだった。

ヘアドネーション（略してヘアドネ）とは、がん治療や脱毛症等様々な理由により髪の毛を失った人々に対し、寄付された髪を用いてウィッグを製作し、無償提供を行う活動である。一人分のウィッグを作るためには約三十人分の髪が必要で、長さは三十一センチ以上であることが条件だ。しかも、三十一センチの髪を寄付しても出来上がるのはショートヘアであるため、ロングヘアのウィッグを作るためには更なる長さが必要となる。

過去に一度ヘアドネを行ったことがある私は、その時当然誰もが知っているものと思い込んでいた。だから、自分の経験談に興味が無さそうなクラスメイトの様子や、認知度の低さにショックを受けたのだ。

当時小学六年生だった私は約五年間伸ばし続けた髪を医療用ウィッグにしてもらうため寄付をした。ヘアドネを決意したのは、私が小学一年生のときだ。きっかけは「髪の毛を失って困っている人達を助けてみない？」という母の言葉だった。続けて母が語ったのは私が生まれるまでの八年に及ぶ不妊治療の記憶だった。治療を始めて二年目に初めて妊娠したが、子宮頸管妊娠という非常に珍しい疾患により、私の兄か姉になっていたであろう子供は諦めざるをえなかった。長年に渡る辛い不妊治療を経てようやく授かった初めての命を諦めなければならないいうのに、子宮や自分の命まで失うかもしれない現実、母は深く悲しみ苦しんだそうだ。そんな失意の中で母を励ましてくれたのは、がん治療のため入院していた患者さん達だった。自分達も辛いはずなのに寄り添い励ましてくれた同室の彼女達に母は救われていた。そんな中、彼女達が話していた「髪が抜けて辛い。」という言葉がずっと母の心に残っていたのだ。

母からありのままを打ち明けられたので、幼かった私は、最初戸惑った。しかし、彼女達のおかげ

で今の私があるということに感謝の気持ちを感じた私は母の提案を受け入れることにした。それからは家族総出で日頃の手入りを欠かさず、一番長かったときにはドライヤーで温風と冷風を交互にあて、三十分かけて丁寧に乾かした。髪が長くなるにつれ母が毎日のようにヘアアレンジを変え、小学校ではそれに気づいたクラスメイト達が話しかけてくれるようになった。以前は人見知りだった私だが、髪のおかげで友達がたくさんでき、人生が変わった。「たかが髪」かもしれないが、私は「髪の毛は大切」だと実感した。

小学六年生の頃には私の髪は太ももの辺りまで伸びており、私のトレードマークになっていた。「断髪式」当日は新聞記者の人に来てもらい私のヘアドネは地元ページの記事になった。寄付した髪は六十センチになっていた。私はどうしたら世の中の人達にこの活動を知ってもらえるかを考えた。その結果、報道の力を借りることにした。だが、新聞に自分や家族の名前と顔写真が載ることは正直躊躇した。それでもヘアドネの認知に一役買えるのならば後悔はないと考えた。ただ長年手入れをしてきた愛着もあって、いざ髪を切ろうとすると寂しい気持ちになり、そのとき初めて髪を失った人達の気持ちが分かった。

最近、人権問題、多様性というワードをよく耳にするようになった。もし髪がなくても恥ずかしくない、気にする必要がないという世の中になれば、それが理想的な社会なのかもしれない。しかし、まだまだウィッグを必要としている患者さんは多いのが現実だ。

私は現在二度目のヘアドネに向けて再び髪を伸ばしている。そしてこの作文をより多くの人に読んでもらってヘアドネの認知をしてもらい、更には参加してもらいたいと考えている。

私一人がやれることは小さいかもしれないが、この活動をより多くの人達に知ってもらい、一人でも多くの患者さんにウィッグを届けることができるよう、今後もこのボランティア活動を続けていきたい。一人でも多くの患者さんが笑顔になることを願って。



優秀賞（愛知県青少年育成県民会議会長賞）・共感賞

繊細という名の才能 ―短所は長所の裏返し

おおぶにし
大府市立大府西中学校 3年

こん どう あま ね
近 藤 天 音

世の中には、さまざまな特性を持っている人がいます。特性は全ての人が持っているものであり、一人一人のイメージを作る大切な役割を持つものです。しかし、その特性にゆえ生きづらさを感じる人も少なくありません。その一つに「繊細」という気質があります。HSPとも呼ばれますが、生まれつき感受性が高く感覚が敏感で刺激を受けやすい人のこと。考えすぎてしまう、落ちこみやすいなど特徴はたくさん。

私も同じ傾向があるため、学校生活でもいくとなく生きづらさを感じることがあります。先生やクラスメイトの顔色を伺い、学校行事ではすぐにぐったりしてしまう。私なんか話しかけたら気持ち悪いのではないかと疑い、いつのまにかクラスの中で孤立する。最初はがんばって自分から話しかけていくも、空回りして結局、「消しゴム貸して」の一言すら言えなくなっていました。今、この学校の中にいる友達はゼロだ。私は自分のことを何度も恨み憎みました。どうしていつも私はこうなんだろう。こんなちっぽけな理由で泣くとは情けない。こんな自分がこれからも生きていてもいいのか。そんなことをしょっちゅう考えていました。まるで自己否定のオンパレードです。

そんな時、とあるネット記事で「繊細な人の特徴」というものを見つけ、ざっと眺めてみました。ほぼ全ての特徴が見事に該当。苦笑いしつつも一つの考えが頭をよぎりました。あれ、意外と良いところ多くないか？ ネット記事に書いてあった特徴をピックアップすると、「共感力が高い」、「小さな変化に気付きやすい」、「聴き上手」などだ。私がいつも短所として捉えていたことです。その時やっと、短所は長所に変換できることに気が付かされたのです。

あれから私は、何も変わっていません。クラスでは一人だし、空回りしまくり、泣きまくりです。今でも消えなくなることは多々あります。ただ、一つ。思っていること、繊細は短所なんかじゃない、生まれもった才能だ！と。だって、まわりの人が気付かない、小さなことに気付いたり、人の

気持ちを最大限考えて発言できるなんて才能以外の何だっていうんでしょう？ 私と同じように悩んでいる人たちにぜひ共有したい。自分の特性を自分で否定せず、もっと自分が最高で、自信をもって生きていいんだよ。もちろん、これらの短所変換は繊細以外の短所と呼ばれる場所にも同じことが言えます。たとえば、繊細とは真反対である鈍感さだって立派な才能です。それこそ繊細な人がひそかに憧れている才能の一つだったりします。自分の思ったことを素直に口に出せたり、苦手な人の苦手な話を右から左へと受け流せたり、それをあたりまえにできない人がいることをあたりまえにできるって、とっても素敵なこと。他にも、優柔不断な人は、あらゆる可能性を捨てずに判断に慎重。八方美人な人は、柔軟性がある対応力の天才。飽きっぽい人は、チャレンジ精神が高く可能性に満ちているなど。得技が無いという人は、さまざまな事に適応出来るオールラウンダーです。短所が無い人もいないが、同時に長所が無い人もいません。このように、考え方を少し変えてみるだけで、あら不思議！ さっきまで短所だらけの自分がたちまち長所だらけになっているではありませんか。ただの言い訳と言われてしまうとそれまでだけど、私はこの短所変換を心のすみに置いておこうと思います。

今の世の中は良い所よりも悪い所を見られてしまうことが多いように思える。私の特性である繊細さだって、悪くとられてしまうことの方が多いかもしれません。なにしろ、自分でもそうだったから。でも、だからこそ私は短所も自分の強みとして出していきたい。誰に何を言われてもかまわないし、周りに短所と見られてしまうんだったら、せめて自分で自分を肯定できるようになりたい。そして、そんなふうにいるんな人がおたがいの短所も認め合える世の中になってほしい。

そして最後に、叫びたい。

あなたは決してダメダメなんかじゃない！

短所は長所の裏返しだ！



奨励賞

唯一無二の恩

名古屋市立^{しんこう}新郊中学校 3年

私の家庭は六人家族で、姉妹がいる。お姉ちゃんが三人と、末っ子の私。家の中はいつもにぎやかで、朝から晩まで誰かの声が響いている。姉たちはそれぞれ性格が違い、しっかり者もいれば、マイペースな子もいる。私はそんな姉たちに囲まれて、笑ったり、泣いたり、時には喧嘩することもありながら育ってきた。でもそんな私がこの家族の一員になれたことには、実は深い背景があった。

「あなたはね、産まれてくるときに、周りから反対されていたの。」

突然のことに、私は驚きと戸惑いで頭の中が真っ白になった。

「なんで、い、？ 私って本当に産まれてきてよかったのかな？」

心の中に浮かんできたのは不安と疑問、そして少しの悲しさだった。私は母の目を見つめながら静かに問いかけた。

「どういうこと？ じゃあ、なんで私はここにいるの？」

母は私の目をまっすぐに見て、そして静かに語り始めた。

私の母は、長女を帝王切開で出産した。そして次女、三女も同じように帝王切開での出産だった。帝王切開による出産は、回数を重ねるごとに母の体への負担が大きくなるという。母の体はすでに三度の出産で大きな傷を負っていた。だから、4人目を望んだとき、周りは強く反対した。

医師も助産師も、そして父でさえ、「これ以上は危険だ」と言ったそう。母の命がかかっていたからだ。私が産まれるということは、母が命のリスクを背負うということだ。

それでも母はあきらめなかった。

「この子は絶対に産む。」

そう母は言い、家族や医療スタッフを説得し続けた。命の危険を知りながらも私を産むことを決意してくれたのだった。

帝王切開の日、母は祈るような気持ちで手術台に上がったそう。ただ無事を願っていた。やが

いし かわ ま あい
石 川 真 愛

て私の産声が病室に響いたとき、母は喜びで涙があふれたと話してくれた。

私が産まれたことで、母の体にはさらに深い傷が残った。今でも、お腹の傷が痛む時もあるそう。それでも母は一度も、私を責めるような発言をしない。むしろ、

「あなたが産まれてきてくれて本当によかった。いつもありがとね。」

と何度も言ってくれる。

私は、そんな母の想いに心から感謝している。思えば、小さい頃から「あなたはある意味特別だよ。」と母に言われていた。その意味が、今はよく分かる。姉たちにも大切にされ、私はこの家族の中で、当たり前のように愛されて育ってきた。でもその「当たり前」は、母の大きな決断と勇気の上に成り立っていたものだった。

もし、あのとき母が恐れに負けていたら。もし、父が母の体を優先していたら。私はこの世界に生まれることすらできなかった。そう思うと、今こうして生きていることが、どれほどの奇跡なのかということに気がつく。

家族との日常。友達との日々。好きなことを見つけれられる楽しさ。どれもこれも、母が私を産むことを選んでくれたからこそ手に入れることができたものだ。

私はこれからも、母と父に心からの「ありがとう」を伝え続けたい。どんなに言葉を尽くしても伝えきれないけれど、この命の恩を忘れずに、自分の生き方で返していきたいと思っている。

そして最後に皆さんに主張したいことは、「今、ここに生きていることを当たり前だと思わないでほしい」ということです。命は誰かの決意と支えの上に存在している。

私は母と父と、そして姉たちの元に産まれることができて、本当によかった。どんなに言葉を尽くしても足りないけれど、心の底から「ありがとう」と言いたい。

命を大切に、今日を大切に。私はこれからも胸を張って堂々と精一杯頑張って生きていきたい。



奨励賞

「私たちが未来のためにできること」

あさひ
豊田市立旭中学校 3年

かわ い ゆず な
河 合 柚 奈

皆さんは、豊田市の旭地区を知っていますか。

そう言われてもどこか分からない人が多いのではないのでしょうか。私は愛知県豊田市にある、旭地区というかそ地に住んでいます。近くにお店もなく、人口も少なく、できることが限られています。時々不便な生活だと思ってしまうこともあります。このような、かそ地の未来は日本で大きな問題になっています。ですが、私はこの旭地区がとっても大好きです。

私は五年前に旭地区に引っ越してきました。引っ越してくる前は以前住んでいた地域とは異なる環境下で過ごすということに不安でいっぱいでした。しかし、いざ移住してみると自然豊かな地域でいろいろなものに触れ合うことができたり、地域の人みんなが仲良く接してくれたりするので楽しく過ごすことができました。今では引っ越してきてよかったと思えるくらい、旭地区が大好きになりました。

私は中学生になってから旭地区にある、しきしまの家という地域の方々をサポートする施設でボランティア活動を始めました。

きっかけは、しきしまの家で働いている友達のお母さんからの誘いでした。しきしまの家でボランティア活動することで地域の方々との交流も増え、いろいろ新しい発見ができるのではないかと思います。部活や勉強と両立するのは難しいと思っていましたが、やっているうちに私の憩いの場となりました。幅広い年代の方とお話することで、旭地区のことをもっと知ることができるし、みんなが楽しいと思えるような地域をつくることができたのではないかと思います。それからどんどんしきしまの家がいろいろな方々に知られテレビでも取り上げられました。ボランティア活動をやってよかった、私たちがここまで関わることでよかった、などの達成感に包まれました。最初は興味本位でやっていたのに気づけば没頭してボランティア活動をし、みんなから感謝されるようになり、中学生の私でも地域のためにできることがあるのだと気づきました。

私の学校では総合的な学習の時間に旭地区で栽培されている「ハラペーニョ」という唐辛子の一

種を題材にして、他の地域から訪れる人々との交流を増やしていくという目標を立てました。旭地区はあまり知られていない場所ですが、良いところもたくさんあるということを伝えるために、「魅力発信・ザ★・ハラペーニョ」というスローガンを作りました。

旭地区という小さな場所でも、たくさんの方が「行ってみたい」「来てよかった」「また来たい」など好印象をもってもらえるよう、三年生のみんなで協力しながらイベントを作り上げていきたいです。そして私一人でも地域のためにできることを考えた際に、一つのことが思い浮かびました。それは将来の夢についてです。

私の将来の夢は看護師になることです。一人でも多くの人の支えになりたい、いろんな人の笑っている顔が見たいと思い、看護師を目指すようになりました。いろいろな人を助けることで、旭地区を助ける。患者さんの笑顔を増やすことで、旭地区のみんなの笑顔が増える。というように私の将来の夢と旭地区の未来のためにできることは繋がっています。もし私が看護師になることができたなら、旭地区などの山間部で活動し、幅広い年代の方々に寄り添い、ありがたいと思ってもらえるような地域看護師として活躍したいです。

このまま人口が少なくなっていく私たちが生まれ育った故郷がなくなっていくことはとても悲しいです。そのためにはたくさんの方の助けが必要となってきます。ぜひこの話を聞いて少しでも興味を湧いた方は旭地区に訪れてみてはいかがでしょうか。きっと想像以上の心地よい地域だと思うことでしょう。

私たちが未来のためにできることは無限大だと思います。残りの半年間で一人でも多くの方に旭の魅力が伝わるように精一杯頑張ります。

多くの人々が大人になっていくにつれ他の地域に移住するなどして地域との関わりがなくなっていくかもしれませんが、私は愛し愛されたこの地で私の居場所を作ってくれた旭地区、そして親切に接してくれている人たちに、お礼をする側となり助けていくことができたらいいなと思っています。



奨励賞

多様性とわたし

しんしろ
新城市立新城中学校 3年

多様性という言葉に、違和感を覚えたことはあるだろうか。

近頃、「多様性」という言葉をよく耳にするようになった。性別、宗教、性的指向、文化などの価値観の違いを認め合い、多くの人が自分らしく生きやすい世界にしていこうという目標からできたものだ。とても素敵なものだと思う。

だが、最近その多様性がかえって人々を分断させているのではないかと感じることもある。価値観を認め合うのではなく、自身の価値観を押し付けることになっていないかと思うのだ。

以前、私の友人同士で実際にあったことである。ある日、学校からの帰り道で私を含め、友達四人で楽しく話していた。話題が最近私の好きな動画投稿サイトのことになった。一人が最近好きで夢中になっている動画について、「すごく癒されるし、寝る前に聴くと落ち着くんだね」と言った。しかし、別の一人は「私は気持ち悪いって思う。変な人が見てるイメージ」と言う。沈黙が走った。そして、その動画を好きだといった友達は、ただ苦笑いをしているだけだった。

私は困った。二人とも違う価値観なのだ。誰でも好きなものを否定されると悲しい。だから否定した友達に「好きな人も多いから、否定するようなことは言わないほうがいい」と訴えた。

しかし否定した友達は譲らない。「私は無理なの。私の感想を言っているだけ。」と。気まずい空気が流れた。私も別の友達も、何となく目をそらした。好きだと言った子が怒っているのは分かった。楽しい下校だったはずなのにバツの悪さを感じた。

価値観の否定は、無自覚な偏見にもつながる。自分の価値観こそが正しいと言い切る。それは、無意識に多様性を否定しているのではないか。場合によっては、それは差別にもつながる。「意見を言う自由」と「相手を尊重する心」の間に葛藤

かわ むら ち え
川 村 智 慧

があり、個性と常識のすれ違いがある。「多様性」の名のもとに繰り返される、お互いの価値観のすれ違い。それを相手に求めると、日常の関係性が崩れる。

ニュースの報道などから特にその傾向が強いと感じた。特定の価値観に反する発言をすれば、炎上し、社会的制裁を受ける。それがときに、顔の見えない誰かを追い詰める。

相手の思う多様性には見向きもせず、自分の思いを押し通す。それはもはや、「多様性」ではなく「同調圧力」ではないだろうか。

多様性を認め合うには、違いを理解しようと努めつつ、自分と異なる価値観も許容するという双方向の寛容さが不可欠であると思う。しかし現代社会では、自分の正義感に基づいて他者を糾弾する傾向が強まっている。自分の多様性を受け入れる、だがあなたの考えは受け入れないといったことは、対話を不可能にし、社会をより分断させている。SNS問題もその一つだと思う。

私は、多様性とは「押し付けるもの」ではなく、「育てるもの」だと考えている。人と違う意見に出会ったとき、「どうしてそう考えるのか」と問いかけてみた。すぐには否定せず、一度受け入れた。そうすると、なるほど、そういう考えもあるんだなと一歩ひいて考えることができた。それが多様性を認め合う社会をつくっていくことにとって大切だと感じた。

もし誰かの意見に疑問を抱いたとき、すぐに批判する前に、なぜその人がそう考えるのか、と少しだけ考えてみてほしい。もちろん、私の考えに共感してもらわなくても構わない。この話は、同意してもらうためのものではなく、ただ「知ってもらう」ために伝える。これはあくまで私の主張であり、私の考えだ。多様性を認めるのと同じで、誰かに私の考えを押し付ける気持ちはない。それが多様性のあるべき姿だと考えているのだから。



奨励賞

心の声を聴く

田原市立東部中学校 3年

「聞こえない。」

それだけで人間関係が変わるかもしれない。それだけで、学校の授業で、周りのみんながしていることができなくなるかもしれない。将来、仕事ができなくなるかもしれない。そんな不安を背負って生きている人たちがいる。

僕には、遺伝性の耳の病気がある。完全に聞こえなくなるわけではないが、手術をしないと空気が詰まった感じになるらしい。小学校のときはあまり気にしていなかったが、中学校生活が始まると不安を感じるようになった。友達との会話や、先生の話が少し聞こえにくい。小さい声だと何も聞こえなくなった。周りの人たちからは、ただ耳が悪いだけと思われているが、本当は、みんなが思っているより、もっとずっと聞こえにくい。

聞こえにくいな。このままどんどん聞こえなくなるのかな。そうしたら、授業はどうなるのかな。人間関係はどうなるのかな。漠然とした不安が僕を襲う。

先生の言葉や友達との会話が聞き取りにくいとき、聞き返すこともある。でも、必要な情報を聞き漏らしたりすることもある。周りの人たちからは、耳が悪いことは理解してもらっている。けれど、僕がどれくらい聞こえていないのか、わかりにくいと思う。それに、聞き返すことが申し訳ないという気持ちは、聞こえることが当たり前のみんなにはわからないだろう。正直、聞き返すのも面倒で、うやむやにすることだってある。滞りなく会話ができていく友達とうらやましい。

もっと聞こえなくなったらと不安になっていたとき、母が「つらいことがあったとき、それを逆手にとっていけたら、それはあなたの武器になるし、強さになる。」

と言ってくれた。その言葉を聞いて、僕は、難聴の方に寄り添えることを僕の強みに変えていこうと思った。

この世には、生まれつきほとんど耳が聞こえない人がたくさんいる。以前、テレビで、難聴の赤ちゃんに補聴器をつけた瞬間、満面の笑みがこぼ

すず き る しん
鈴 木 瑠 心

れたシーンを見た。その赤ちゃんの笑顔を見て、僕は、難聴の方の力になれる仕事がしたいと強く思った。

調べてみると、言語聴覚士という職業があることを知った。「話す」「聞く」というコミュニケーションと「食べる」という摂食の機能に問題がある人に対し、検査、評価、指導、助言などのサービスを提供する専門職だ。その中でも、僕は、「聞く」という聴覚分野の仕事をしたい。聴覚分野で担う役割は、主に聴覚障害のある方々をサポートすることだ。例えば、聴覚検査や補聴器の選定、調整、聴覚訓練などを行い、コミュニケーション能力の回復や維持を目指していく。また、難聴の早期発見や、高齢者の補聴器リハビリなど、広い年齢層の方々をサポートする。

僕の祖母も耳が悪かった。話しかけても返事がなかったり、聞き返したりしてきた。だから、僕はだんだん話しかけるのをやめてしまった。今になって思う。きっと祖母に寂しい思いをさせてしまった。後悔している。もっと聞こえやすいように話せばよかった。話しかけて笑顔が見たかったのに、祖母はもういない。

人は、コミュニケーションありきの生きものだ。円滑なコミュニケーションによって生きる活力を見出していると言っても過言ではない。話したり聞いたりすることは、とても大切だ。

「わかってほしい。」

障がいのある人だけではない。誰もがそう思っている。けれど、周りから簡単に理解されるわけではない。

僕は、言語聴覚士になる。障がいのある人と健全な人との壁をなくしたい。そして、体の機能が低下した人だけでなく、僕の周りのすべての人を助けられるような人になりたい。今より耳が悪くなったら、僕は補聴器をつけようと思っている。それから、手話も学びたい。耳が悪くて経験していくことを、これからの自分の将来の強みとして、同じ思いをする方々の支えになりたい。

僕は、耳の聞こえは悪いけど、人に寄り添い「心の声を聴く」言語聴覚士になりたい。



奨励賞

違いを知り、誇りを持ち、未来を歩む

いなざわにし
稲沢市立稲沢西中学校 3年

た な か さ ら
田 中 紗 来

春休みに父の働くアメリカへ行きニューヨークを旅した。皆さんはニューヨークと聞いて、どんな街を思い浮かべるだろうか？「高層ビル群」「近代的」「世界一の街」など色々な考えがあるだろうが、私が訪れたそこは憧れていたキラキラした街ではなかった。ホテルから一歩外に出れば街はゴミと汚水で溢れ、歩道や地下鉄の駅にはホームレスや鼠もいた。観光客も住人も、警察官すら平気で信号無視をし、タクシーは常にクラクションで威嚇した。「これが世界一の街？」理想との落差に、散策が苦痛なほどだった。

美術館や高級レストランのトイレだけを私は使った。なぜなら、それ以外の便器は汚れがひどく、溢れるゴミを目にすると悲しくなったからだ。空港のトイレですらそのような状態で、私は無意識に流れ続ける水を止め、大量に散らかったペーパータオルをゴミ箱に捨てた。その瞬間、清掃員に「カインドガール！モラルガール！」と声をかけられた。戸惑っていると、母が「サンクス」と笑い、私に「お掃除は係の人がやるから、見ないふりが少なくない。アメリカは学校で掃除の時間がないの。」と言った。私はふと以前観た『日本の小学校の映画』を思い出した。「六歳児は世界のどこでも同じようだけれど十二歳になる頃には、日本の子どもは“日本人”になっている」そのキャッチーな一文は私を激しく納得させた。

私に染み付く衛生観念をはじめ公共施設を気持ちよく使う美化意識や行動は習慣である。園児の頃からお片づけとお掃除の歌を口ずさみ、中学生の今も毎日校内清掃に取り組む。街中や歩道にゴミを捨てないのもルールやマナーとして学んだ。幼少期から道徳心やモラルとして備わり、私に深く根付いて“日本人”になったのだ。「日本が一番いい！もうアメリカは無いわ。」と私は漏らした。するとそんな私を見て、父がアメリカで働く難しさ、特に日本の価値観の押し付けがアメリカ人部下からの反感を買うと話した。家族の特別な日は早く帰宅し、自分の人生プランを大事にするから転職が盛んだということも聞いた。アメリカで兄を出産した母は、アメリカの教育も魅力的だった

と話した。アメリカでは3歳から「ショウアンドテル」というプレゼン力への取り組みがあるし、「他人との違いこそ自分らしさだ」と教わるらしい。兄が「アメリカ凄い」と喜ぶので、母が「紗来は海外に出て日本の良さを再認識できたのよ」と強い口調で付け加えていた。

アメリカの良いところ探しをしてみた。幼少期から意見を伝えられる、個人や多様性を大事にし得意を伸ばす視点から芸術や文化、スポーツなどが豊かで世界から憧れを持たれる。では、日本人の強みは何か？駐在員として調整役を担っている父は、「時間厳守から始まる納期厳守や完璧を迫り及して改善改良の姿勢を持ち続ける日々がものづくりの魂の部分であり、世界に評価されている」と語ってくれた。私の良いところは？あの空港トイレを思った。公共の場を丁寧に使うのは単に清潔好きでなく、他者を思いやりの行動だ。ポイ捨てをせずにごみを拾うのも不快を快適に変えたからだ。これらを協力して行い、広げていけるのが日本人で、他者や社会とのつながりを大切にしていけるのが日本人だ。これが世界で言われるおもてなしの心や清潔さ、秩序につながっているのではない。それぞれに良さがいくつもあってどちらが正しいというものではない。異なる価値観だが互いに尊重すれば良い方向に進むだろう。

ニューヨークという多様性と自由の街で過ごし、私は理想と現実を目の当たりにし絶句した。と、同時に自分が秩序を重んじる日本人だと改めて気付いた。これを機に日本の地でも積極的に異文化に触れ、習慣・価値観の違う人と交流していきたい。それらは国際性を身につける初めの一歩だ。そして、歴史や背景を学ぶのはもちろん、現在進行形の世界中の問題から目を背けず、考え続ける姿勢が必要だ。それは、私が「世界の一員として」生きることにつながっているからだ。再びニューヨークに飛び込むその日まで、私は他者への思いやりや配慮を忘れないモラルガールとしての行動をし続けようと決意した。日本人の誇りと自信を胸に突き進みたい！！



奨励賞

共に生きる社会

岡崎^{むつみ}市立六ツ美中学校 3年

「これ、僕が作ったスケルトン。これは…」

「いきなり何のこと。何のお話してるの。」

「マインクラフトだよ。これがゾンビで…」

弟の話は止まらない。大好きなゲームのキャラクターをレゴで作って、架空の世界を現実かのように楽しそうに話してくる。小さい頃からそう。弟の頭の中には想像の世界が広がっているようで、レゴにはせりふを付けて一人遊びをしていた。でも僕が、

「学校、どうだった。」

と聞くときは、

「…分からない。覚えてないよ。」

漠然とした質問や関心のないことには、なかなか会話が続かない。戸惑う僕に気を留める様子もなく、次の瞬間また自分の話を始める。

弟とは五歳違い、四人男兄弟の四番目だ。三番だった僕は、弟が産まれて兄になれたことがとてもうれしく、誇らしい気持ちになった。かわいくて仕方がなかった。でも、成長してくると、お兄ちゃんだから譲ってあげて。家族からのそんな言葉に、弟ばかり優しくされて…とけんかすることが増えた。それは、本当に僕の中では日常で、弟の特性を意識したことは一度もなかった。

そんな弟が、僕が六年生のときに入学してきた。入学式の朝、家でぴかぴかのランドセルを背負ってはしゃいでいたが、式で名前を呼ばれても返事はなく、弟が座るはずの席はずっと空いたままだった。なんで。朝、あんなにうれしそうだったのに。そう思いながら帰宅した僕に、弟が体育館に入らずに教室にいたことを、両親は教えてくれた。その横には、いつもと変わらない笑顔の弟がいた。

弟は、経験したことがないことや想像できないことには、不安になり対応することが難しいのだ。弟に「生きづらさ」を抱える障がいがあることは聞いてはいたが、改めてそれを感じた日となった。

でも僕たち家族の日常は、その日を境に変わることはなく、いつも通り騒がしく、にぎやかな日々

だん した けい しろ
段 下 慶士郎

が続いた。唯一変わったのは、僕の気持ちだった気がする。弟は特別支援級に在籍することになった。困ったら僕が守ると、朝は教室まで連れていくことが日常に加わった。一年後、僕が卒業した後は、母と一緒に登校している。弟は今、四年生だ。耳で聞くよりも視覚で情報を得ることが得意で、テレビを見るときは字幕ボタンを押して、目で字を負うことで情報を補っている。得意なことにはずば抜けた集中力があるから、僕が作れないような立体的な造形物を簡単に組み立てる。僕の機嫌が悪いときに八つ当たりしてしまっても、

「優しい慶君に戻ってほしいんだよ。」

と、顔をのぞき込みながらストレートな言葉を掛けてくる。大好きだよと、家族全員におはようの挨拶くらい自然に伝えてくれる。

僕は、そんな弟の姿を見ていて、障がいを抱える人のその場面、その部分だけを切り取った見方をしていないかと、自分に問うようになった。いや、障がいに関係なく、僕が接するすべての人の一部分だけを見てその人を決めつけてはいないだろうか。「生きづらさ」をもち、困難や戸惑いも多い日々を生きている弟。悲しいこと、苦しいこともあるだろう。でも、にこにこ笑いながら帰ってくる弟。周囲からは少し個性的に映るかもしれない。僕はそんな弟を見ると叫びたい気持ちになる。「弟は、僕よりずっと優しくて素直で、裏表がなく、手先が器用で…。最高の弟です。」

ダイバーシティ、インクルーシブ社会、多様性、様々な言葉が使われ、社会は差別をなくそうとしているが、僕はその答えがとてもシンプルなことだと思う。『相手を決めつけない。』僕が弟のいろいろな面を知ったように、まずは相手を知ろうと思う。相手の言葉に耳を傾けよう。知りたいことを聞いてみよう。そうすることで、理解し助け合い、協力できる社会が生まれていくのだと思う。



奨励賞

幸せの正体

とよやま
豊山町立豊山中学校 3年

「幸せになりたい」と思ったことはあるだろうか。おそらく、多くの人が一度は考えたことがあるだろう。私は、幸せとは何か特別なことが起こったときに感じるものだと思っていた。テストで良い点を取ったとき、欲しかったものを買ってもらえたとき、誰かに褒めてもらえたとき。もちろん、それはとても嬉しいことだ。でも、その幸せは、時間が経つにつれ、消えていってしまうように思えた。では、本当の幸せとは何なのか。私がそれについて考えるようになったのは、大好きなじいじとの別れだった。

幼い頃、私とじいじはよく散歩をした。じいじは歩きながら、冗談を言った。「じいじは小さい頃に飲み込んだ飴が、まだ喉に残ってるんだよなあ。」そう言って、喉仏を指差した。幼い私は、本当に飴が入っていると思い、よく触っていた。春は愛犬と走り回り、夏はじいじの家で昼寝をして、秋は公園でたくさん遊んだ。冬は凍った田んぼをしゃくしゃくと歩き回った。「けがするんじゃないぞ。」とじいじは優しく微笑んだ。あの頃の私は、ずっとじいじと一緒にいられると、この時間が終わることはないと思っていた。でも、それは違った。中学校一年の正月、じいじは旅立った。私たちに心配をかけたくないと、余命宣告を受けていたことも、手術をしていたことも内緒にしていたため、私にとっては突然の別れだった。私は、じいじと歩いた道も公園も田んぼも避けるようになった。じいじとの思い出が詰まった場所には、じいじはいないから。二年生になり、久しぶりにじいじの家に行った。とても懐かしく、ふとあの頃が思い出された。すると、ばあばが「散歩しに行こうや。」と私を外に連れ出した。向かった先は、じいじとよく散歩に行ったあの道だった。私は、じいじとの思い出が溢れ出し、涙がこぼれた。じいじは、私の思い出の中に生きていたのだ。

そのとき、私は理解した。幸せは、特別な出来事の中にあるのではなく、平凡な日常の中に隠れているのだと。朝、家族と「おはよう」と言えること。友達と何気ない会話で笑い合えること。大好きな人と散歩すること。そんな当たり前の毎日

まつ おか さく ち
松 岡 咲 花

の中に、幸せは存在しているのだ。そうした小さな幸せを見つめることができれば、日常はもっと輝くのではないかな。

では、どうすれば本当の幸せに気付くことができるのか。じいじが亡くなった後、私は三つのことを意識するようになった。一つ目は、小さな感動を大切にすることだ。ご飯を食べたとき、「美味しい」と感じる。素敵な音楽を聴いて、「この曲、好きだな。」と思うこと。そういう小さな喜びをちゃんと感じる事ができれば、毎日はずっと幸せなものになる。二つ目は、「ありがとう」と言うことだ。家族や友達に「ありがとう」と伝え、相手が笑顔になり、その笑顔を見た私の一日も明るくなる。感謝の気持ちを伝えることで、自分がどれほど多くの人に支えられているかに気付き、日常の中にある幸せを実感できる。三つ目は、自分の気持ちに耳を傾けることだ。私はこれまで、円滑な人間関係を築くために、自分の気持ちを抑えて相手の考えを優先してしまうことが癖になっていた。いつしかそれが当たり前になり、自分の本心を見失うこともあった。しかし、じいじの死に直面したとき、私は人目を気にすることなく、大粒の涙を流した。そして、時には自分の心に正直でいることも正しいと気付いた。

じいじは、もうこの世にはいない。ただ、じいじの言葉や笑顔、ぬくもりは、ずっと私の心の中にある。それは、じいじと過ごした時間が幸せだったという証拠なのだと思う。幸せは、目には見えないし、特別なものでもない。でも、それに気づき、何気ない日常の中に幸せを探するとき、本当の幸せは姿を現し、そっと私たちに微笑みかける。どこか遠くにあるのではなく、ずっと私たちの傍にある。毎日の小さな幸せを見つめられれば、世界はもっと明るくなる。私はそう信じている。

さあ、行ってみよう。じいじと歩いたあの道に。そうすれば、私の心にいる「じいじ」に会えるはず。そして、じいじと手を繋いで歩いていた頃よりも、自分らしく前に進めるようになった私の姿を見せてあげよう。また一緒に散歩しようね。大好きだよ、じいじ。



奨励賞

世界はうつくしいと

かにえ
蟹江町立蟹江中学校 3年

「そうしてわたしたちの会話は貧しくなった。」
中学三年生、国語の教科書を開いてすぐのページに詩が載っている。長田弘の「世界はうつくしいと」だ。その詩の中に冒頭の一文がある。「いつからか、気がつくとも誰も『うつくしい』という言葉のためらわずに口にしなくなった。そして私達の会話は貧しくなってしまった。」このような始まりだ。

私の弟はADHD、いわゆる発達障害というものを持っていて、トゥレット症の一種である汚言症という症状がある。本人の意思とは別に暴言や卑猥な言葉を連発してしまうため、弟はよく誤解されやすい。私自身、弟と口論になると、「死ね」「消えろ」といった暴言の他に、口に出すものばかりされるような性的な言葉をぶつけられる事がある。朝起きてリビングへ行くと、いきなり容姿を馬鹿にされたり、罵倒されたりすることもある。言われると当然、イヤな気持ちになる。仕方がないと頭の中では分かっているけど腹が立つ。しかし、それ以上に私を不快にさせるのは、「お前もADHDなんじゃないの」「発達障害みたいな事言うなよ」というような差別的発言。「死ね」「クズ」「消えろ」などの暴言。この世で誰もが簡単に、軽々しく暴言を吐けるようになってしまった環境だ。

私の友人も、学校でイヤな事があれば「死ねばいいのに」と言ったり、中指を立てたりする。レクリエーションでドッジボールをすると、「死ね」と叫びながらボールを投げつける生徒がいる。もはや当たり前になったこの光景をわざわざ注意する人なんてほとんど先生達だけで、注意されてもわずらわしそうに過ぎ去っていく。

弟の汚言症は、ADHDと同様に治せないものだ。だが、日常的に暴言を吐く人達のほとんどは、「健常者」という枠の中にいる人だろう。私達は風邪を引いても、薬を飲んだり、休息をとったりすれば治る。重い感染症などは、治療をしても後遺症が残る場合があるが、病気の元となるウイルスや菌はいなくなるはずだ。でも、弟は。弟のように「特性」を持つ人々は…。病気とは違って、薬を飲んで症状を軽くすることができても、できなくても、持って生まれてきたその「個性」をな

やま だ えみ り
山 田 笑 里

いものにすることは不可能だ。

私の母は、よく私と弟が口論になると二人きりになった時に必ず、こんなことを言う。「私達にとって社会生活を営む上で当たり前とされる行動が、あの子達にとっては少し難しい。でも、ほんの少し誰かの優しさが、手助けがあれば、一緒に過ごすことができる。だから障害者手帳やヘルプマークなどで周囲の人達に知らせているんだよ。」と。

ならば、私達はどうか。「健常者」の枠にいる私達は。突発的、衝動的に発言してしまう私の弟とは違って、私達は文章を頭の中で考えて発言することができるだろう。相手の気持ちを考えて会話することができるはずだ。なのに私の身の回りでは平気で人を馬鹿にしている人がいる。「特性」を持つ人々を「障害者」と言って格下に見ている「健常者」がいる。本当は言うてはならないような重い言葉を軽々しく使う人がいる。何気なく放った一言で、傷つく人がいるというのに。そんな人の事を考えずに、日常的に言葉の凶器を使っている。

「世界はうつくしいと」には「あざやかな毎日こそ、わたしたちの価値だ」という文がある。しかし、私は今のこんな世の中は「あざやか」ではないと思う。だから、「うつくしいもの」の話をするべきだと考える。何かあるたびに言葉の凶器を使うのではなく、身近にある「うつくしい」を言葉にしてみることで、心が豊かになり、気持ちが今よりずっと楽になると思ったからだ。日常の中に何気なくある「うつくしいもの。」それに気がつけば、世界はもっと輝いて見えるだろう。以上が私が「うつくしいもの」の話をするべきだと考える理由である。

私はこの詩に十五歳の今出会えて良かった。きっとこの先、様々な壁にぶつかるはずだ。でも、この言葉を忘れずにその壁に挑みたい。

うつくしいもののお話をしよう。

うつくしいものをうつくしいと言おう。

何ひとつ永遠なんてなく、いつか、
すべて塵にかえるのだから、
世界はうつくしいと。



奨励賞

「普通」だらけの日本で

豊川市立御津^{みと}中学校 3年

やま だ ひ ま り
山 田 陽 葵

皆さんは「普通」と言われたらどんなことを思い浮かべますか。では、それは本当に「普通」でしょうか。

私は小学校四年から中学校一年まで男っぽい姿をしていました。ツーブロックにしたり、自分を僕やオレと言ったり……。そんな姿をしていたのは、「普通」の女の子の姿に嫌気がさしていたからです。

その頃、すでに世の中では多様性という考えが浸透していました。でも、それは表面上だけで現実はそうではありませんでした。学校ではイタイと言わんばかりの目。両親は否定的な言葉は言ってきましたでしたが、男の子みたいな服よりも何倍も積極的に「普通」の女の子の服を勧めてきました。そんな両親を見て、私へ「普通」を望んでいるんだと悲しくなりました。

結局、私は周りの目や圧力に耐え切れず、髪をのばし、女の子の服に戻し、僕から私に直しました。女の子はキティちゃんが好きだとネットで知り、キティちゃんを好きになりました。そうして私は「普通」になりました。

でも、周りの「普通」への圧力は性別だけではありませんでした。性格や考え方、癖、好きなもの、嫌いなもの、得意、不得意、特性。他にもいろんな「普通」がありました。考え方や癖が「普通」ではないと怒られ、嫌われ、悪口を言われる。性格や特性が「普通」じゃないと、変な目で見られ、面倒くさそうにされる。好きなもの、嫌いなものや得意、不得意が「普通」ではないと、笑われたり、ひかれたり。

私はそういうのが嫌でした。まるで自分を否定されているような、縛られているような感覚でした。特に日本という国は他の国より「普通」を重視し、みんなと同じにさせようとして、「普通じゃない」を敵視する意識が強いと思います。

「普通」とは、自分にとって都合のいいものや

理想なのではないかと思います。だって相手の考えなどを「普通じゃない」と悪口を言うのは、自分の中の「普通」からはみ出ていると思うからで、都合が悪いからではないですか。「普通」は人によって違います。例えば私はバレー部に所属しています。皆さんは「パンケーキリースープ」や「お見合い」の意味がわかるでしょうか。バレー経験者にはわかって「普通」ですが、未経験者にはわからないのが「普通」でしょう。だから、「普通」を押し付けるのは間違っているのではないのでしょうか。「普通」に囚われず、違っていてもいいと思うのが大切なのではないのでしょうか。好きなものや考え方を「いいじゃん」って認め合うことが重要だと思います。

しかし、私自身も、「普通」や「普通じゃない」と人に言うことがあります。私も多様性を完全には受け入れていないのでしょう。だからこそ私は、考え方や言い方を変えて「普通じゃない」を「面白い」、「すごい」にしました。

私の友達には、動きが独特な子がいます。周りからは「普通じゃない」「変」と言われます。私も初めは、急に変なダンスをしたり、腕を思わぬ方向に曲げたりするので「変」だと思っていました。でも、相手の考えを想像したり、話したりして、仲良くなると、「変」から「面白い」に変わりました。「変」と心のシャッターを閉めるのではなく、相手のことを知ろうとすることで、「普通」の幅が広がり、「普通じゃない」が変わるのではないのでしょうか。

「普通」は生まれたときから組み込まれた機能だから無くすことはできないと思います。でも、その機能で傷つく人を見て見ぬふりはできません。だから私は「普通じゃない」というのではなく、「すごいね」「面白いね」「いいね」と言い合える未来にしていきたいです。

講 評

審査委員長（中日新聞本社編集局次長）

青 柳 知 敏

少年の主張愛知県大会において素晴らしい発表をしていただき、改めて14名の出場者皆さんにお礼を申し上げます。皆さんの発表はとてもレベルが高く、審査委員全員が選考に迷うほどでした。

大会前に皆さんの作文を何回も読みましたが、どの作文も構成や言葉遣い、訴えたい内容がうまくまとまっており素晴らしいと感じました。さらに、大会での発表によって言葉や表情、身振りが加わり、皆さんの訴えはより力強く伝わりました。

自分と異なる考え方や文化・環境にいる人を理解しお互いに認め合う心や、家族への感謝の気持ち、困難にぶつかってもそれを乗り越えて前に進もうとする勇氣、大きな夢等、14名それぞれの主張は我々7名の審査委員一人ひとりにしっかりと届きました。

最優秀賞を受賞された松永さん、これからは堂々と「ヒーローになりたい」と言ってください。国連で働きたいという夢に向かって全力で頑張ってください。そして、格差のない社会を目指して努力し、世界中に「ヒーロー」を広げていってください。

この大会に参加された皆さんにお勧めしたいことがあります。うれしいことや悲しいこと、迷ったり疑問に感じたりしたことがあった時には文字にしてください。そしてその文字を声に出して読んでください。そうすることで考えが少しまとまったり気持ちが楽になったりすると思います。また、5年後や10年後それを見たときに、「あの時はこう感じていたんだ」という自己成長を実感できると思います。短い文章でもよいので続けることを推奨します。

14名の発表は本当に素晴らしく、私も学ぶことが多い大会でした。学校の先生や保護者の皆さんにも感謝申し上げます。このような素晴らしい大会が今後も継続されることを望んでいます。

募集及び審査の経過と結果

1 募集の経過

令和7年4月から6月までの期間、公立中学校、義務教育学校及び特別支援学校中学部については、県教育委員会（県教育事務所経由）と名古屋市教育委員会を通じて、国立・私立中学校及び各種学校等については県から応募を呼びかけた。

2 募集の状況

応募者は、240校から33,831名であった。（管内別の応募状況は、「4 審査の結果及び表彰」のブロック審査の表を参照のこと）。

3 審査の経過

学校選考、地区ブロック審査により選考された14名が、県大会において発表を行い、審査を受けた。ブロック審査日程、審査基準及び県大会審査委員は次のとおりである。また、これとは別に、地元の中学生在が最も共感を覚えた作品を選定する「共感賞」を設定した。

○ 審査日程

ブロック審査

- (1) 尾張・名古屋地区 令和7年6月26日（木） 愛知県三の丸庁舎
- (2) 西三河地区 令和7年6月27日（金） 愛知県西三河総合庁舎
- (3) 東三河地区 令和7年6月25日（水） 愛知県東三河総合庁舎

県大会

令和7年8月20日（水） 午後0時30分～午後4時
名古屋市中区役所ホール

○ 審査基準（ブロック審査は論旨のみ）

(1) 論旨規準

- ア 鋭い感性で、新鮮な主張であるか。（中学生らしさ）
- イ 新しい情報や視点があるか。
- ウ 個人の体験にとどまらず、一般性・社会性があるか。
- エ 提案や提言を実現・実践する意欲が感じられるか。
- オ 論旨が一貫し、構成がしっかりしているか。

(2) 論調・態度

- ア 共感と感銘を与えていたか。
- イ 説得力のある話だったか。
- ウ 熱意と迫力があったか。
- エ 落ち着いて話していたか。
- オ 聴き手に感動を与えていたか。

○ 審査委員（県大会） 7名（◎印は審査委員長）

◎青 柳 知 敏（中日新聞本社編集局次長）

丸 山 健 司（NHK名古屋放送局コンテンツセンター チーフ・ディレクター）

林 智 子（愛知県小中学校校長会 東海市立上野中学校長）

中 馬 英 和（名古屋市教育委員会生涯学習部長）

後 藤 義 広（愛知県教育委員会教育部義務教育課主査）

山 崎 幸 江（愛知県県民文化局県民生活部社会活動推進課多文化共生推進室長）

成 瀬 眞佐子（愛知県青少年育成県民会議副会長）

○ 共感賞

名古屋市の中学校代表者5名が「『共感！』ジュニア選考委員会」の委員として選考にあたった。進行を担当するサポートスタッフを、名古屋市教育委員会にお願いした。

〔「共感！」ジュニア選考委員会〕

東 ひ と み（富士中学校）

桶 屋 美 南（笹島中学校）

岡 部 晴里杏（前津中学校）

板 津 旺 希（丸の内中学校）

佐 野 峻 尋（白山中学校）

4 審査の結果及び表彰

○ ブロック審査（作文審査）

ブロック別	区 分 管内別	応募者数 (人)	参加校数 (校)	各審査での選考数（人）		
				学校審査	地区審査	ブロック 審 査
尾張・名古屋	名古屋市	181※	13	11	8	6
	尾 張	6,467	61	61	14	
	海 部	2,051	20	20	8	
	知 多	1,770	28	28	8	
西 三 河		20,425	87	87	20	5
東 三 河	東 三 河	2,739	25	25	8	3
	新城設楽	198	6	6	3	
計		33,831	240	238	69	14

※個人応募を含む

○ 県大会（意見発表審査）

種 別	氏 名	題 名	学校名・学年
最 優 秀 賞 (愛知県知事賞)	まつ なが たか し 松 永 高 志	ヒーロー	にし お しりつ つるし 西尾市立鶴城中学校 3年
優 秀 賞 (愛知県議会議長賞)	すず き さき な 鈴 木 咲 菜	「ちがい」がつかない心	かい ちきょういくたがくふぞくおかざき 愛知教育大学附属岡崎中学校 3年
優 秀 賞 (名古屋市教育局委員会賞)	ビ ン ハ ナ	言葉の壁を乗り越えて	とよ た しりつりゅうじん 豊田市立竜神中学校 3年
優 秀 賞 (愛知県教育委員会賞)	よし の れ な 芳 野 令 奈	思いを繋ぐヘッドネーション	こ まき しりつとうりょう 小牧市立桃陵中学校 3年
優 秀 賞 (愛知県青少年育成県民会議会長賞)	こん どう あま ね 近 藤 天 音	繊細と言う名の才能 －短所は長所の裏返し	おお ぶ しりつ おお ぶ にし 大府市立大府西中学校 3年
奨 励 賞	いし かわ ま あい 石 川 真 愛	唯一無二の恩	な ご や しりつ しんこう 名古屋市立新郊中学校 3年
奨 励 賞	かわ い ゆず な 河 合 柚 奈	「私たちが未来のためにできること」	とよ た しりつあさひ 豊田市立旭中学校 3年
奨 励 賞	かわ むら ち え 川 村 知 慧	多様性とわたし	しんしろ しりつ しんしろ 新城市立新城中学校 3年
奨 励 賞	すず き る しん 鈴 木 瑠 心	心の声を聴く	た はら しりつとう ぶ 田原市立東部中学校 3年
奨 励 賞	た なか さ ら 田 中 紗 来	違いを知り、誇りを持ち、 未来を歩む	いなざわ しりつ いなざわ にし 稲沢市立稲沢西中学校 3年
奨 励 賞	だん した けい しろう 段 下 慶 士郎	共に生きる社会	おかざき しりつ む つ み 岡崎市立六ツ美中学校 3年
奨 励 賞	まつ おか さ く ら 松 岡 咲 花	幸せの正体	とよやまちようりつとよやま 豊山町立豊山中学校 3年
奨 励 賞	やま だ えみ り 山 田 笑 里	世界はうつくしいと	かに え ちようりつかに え 蟹江町立蟹江中学校 3年
奨 励 賞	やま だ ひ まり 山 田 陽 葵	「普通」だらけの日本で	とよかわ しりつ み と 豊川市立御津中学校 3年

◎ 発表者全員に、「奨励賞」（愛知県青少年育成県民会議会長賞）が贈られました。

共 感 賞	こん どう あま ね 近 藤 天 音	繊細と言う名の才能 －短所は長所の裏返し	おお ぶ しりつ おお ぶ にし 大府市立大府西中学校 3年
-------	-----------------------	-------------------------	--------------------------------------

* 「共感賞」は、開催地名古屋市の中学生の中から選ばれた5名が選考委員となり、最も共感できる作品を選出しました。

* 学校推薦者238名のうち、本大会発表者以外の224名については、愛知県青少年育成県民会議から努力賞が贈られました。

○ 表 彰

県大会発表終了後、発表者に対し、前表の審査結果のとおり賞が贈られた。

また、学校代表となったが、大会発表とはならなかった次表の224名に対し、愛知県青少年育成県民会議会長から努力賞が授与された。

努力賞（224名）

氏 名	学 校 名	学年
谷 口 貴 宣	愛知県立明和高等学校附属中学校	1
今 泉 知 紘	名古屋市立振甫中学校	2
川 原 周	名古屋市立あずま中学校	2
佐 藤 陽万葵	名古屋市立矢田中学校	3
八 森 実 葵	名古屋市立大曾根中学校	2
田 中 翔	名古屋市立前津中学校	2
北 澤 音 々	名古屋市立津賀田中学校	2
伊 藤 鳳 浩	名古屋市立八幡中学校	3
辻 葉 月	名古屋市立守山東中学校	2
宮 野 あおい	名古屋市立鳴海中学校	2
水 谷 維 吹	一宮市立北部中学校	3
斎 藤 百 音	一宮市立南部中学校	3
杉 山 舞音花	一宮市立丹陽中学校	3
西 口 り ん	稲沢市立稲沢中学校	3
上 田 理 央	稲沢市立明治中学校	3
櫻 井 わかば	稲沢市立千代田中学校	3
東 皇 希	稲沢市立大里中学校	3
光 山 杏 珠	稲沢市立治郎丸中学校	3
澤 田 佳 乃	稲沢市立大里東中学校	3
竹 田 美 怜	稲沢市立平和中学校	3
紀 藤 夏 稀	犬山市立城東中学校	3
中 代 りりあ	犬山市立南部中学校	3
奥 村 柚 衣	犬山市立東部中学校	3
西 田 百 花	江南市立古知野中学校	2
中 村 湊士朗	江南市立宮田中学校	2
藤 木 悠 宇	江南市立西部中学校	2
齊 木 ひかり	大口町立大口中学校	3
新 地 紗 季	扶桑町立扶桑中学校	3
関 規 史	扶桑町立扶桑北中学校	3
水 野 早 弥	瀬戸市立水無瀬中学校	3
富 田 悠 聖	瀬戸市立幡山中学校	3
下 津 姫 心	瀬戸市立光陵中学校	3
酒 井 しおり	瀬戸市立にじの丘中学校	3
山 中 智 貴	春日井市立東部中学校	3
深 萱 凛	春日井市立西部中学校	3
山 本 琉希也	春日井市立坂下中学校	3
早 川 葵	春日井市立鷹来中学校	3
寺 田 壮 志	春日井市立南城中学校	3
角 田 新 太	春日井市立石尾台中学校	3
市 川 友 葉	小牧市立小牧中学校	3

氏 名	学 校 名	学年
山 本 怜 奈	小牧市立味岡中学校	3
杉 浦 虹 花	小牧市立篠岡中学校	3
樋 口 結 菜	小牧市立北里中学校	3
佐 々 凛太朗	小牧市立応時中学校	3
西 中 愛 莉	小牧市立岩崎中学校	3
山 本 美 冬	小牧市立小牧西中学校	3
大 上 叶 夢	小牧市立光ヶ丘中学校	1
山 田 真 維	尾張旭市立東中学校	3
山 本 莉 彩	尾張旭市立西中学校	3
坂 脇 梨 琴	豊明市立豊明中学校	3
松 田 はんな	豊明市立栄中学校	3
早 川 万 葉	豊明市立沓掛中学校	3
林 美沙希	日進市立日進中学校	3
佐 橋 真 子	日進市立日進北中学校	3
吉 川 恒 希	日進市立日進東中学校	3
野 垣 梨 紗	清須市立西枇杷島中学校	3
宮 本 美 結	清須市立清洲中学校	3
譚 智 哉	清須市立新川中学校	3
星 野 心 春	清須市立春日中学校	3
荻 原 瑠 花	北名古屋市立師勝中学校	3
佐 合 絆	北名古屋市立西春中学校	3
水 谷 優 希	北名古屋市立白木中学校	3
古 田 希 美	北名古屋市立訓原中学校	3
正 木 瑠 海	北名古屋市立熊野中学校	3
各 務 汐 音	北名古屋市立天神中学校	3
田 中 良 汰	長久手市立長久手中学校	3
岩 本 桃 果	長久手市立北中学校	2
信 元 麻 里	東郷町立春木中学校	3
田 口 紗 優	津島市立天王中学校	3
大 橋 楓	津島市立藤浪中学校	3
長 尾 胡 桃	津島市立神守中学校	3
浅 井 菜 緒	津島市立暁中学校	2
臺 ひなた	愛西市立永和中学校	3
鷺 尾 リ カ	愛西市立立田中学校	3
久保田 悠 日	愛西市立八開中学校	3
久 野 友里那	愛西市立佐織中学校	3
村 上 楓 香	愛西市立佐織西中学校	3
大 野 菜 帆	弥富市立弥富中学校	3
平 下 友 誠	弥富市立弥富北中学校	3
佐 藤 綾 珂	あま市立七宝中学校	3

氏 名	学 校 名	学年
西 野 心	あま市立七宝北中学校	3
藤 澤 紗 彩	あま市立美和中学校	3
丹 羽 柚 希	あま市立甚目寺中学校	3
佐々木 結 衣	あま市立甚目寺南中学校	3
松 永 た み	大治町立大治中学校	3
地 下 凜 愛	蟹江町立蟹江北中学校	3
久 野 夢 月	飛島村立飛島学園(小中一貫校)	9
池 田 菜々花	半田市立半田中学校	3
平 尾 美 羽	半田市立亀崎中学校	3
竹 内 梨佐子	半田市立成岩中学校	3
芳 金 幸 乃	半田市立青山中学校	3
山 田 理紗子	常滑市立鬼崎中学校	3
木 下 凜 乃	常滑市立常滑中学校	3
西 陽向葵	東海市立名和中学校	3
矢野東 亜 実	東海市立上野中学校	3
村 田 苺 花	東海市立平洲中学校	3
柴 田 眞 希	東海市立横須賀中学校	3
白 杵 美 桜	東海市立加木屋中学校	3
豊 島 亜衣理	大府市立大府中学校	3
本 田 彩 衣	大府市立大府北中学校	3
浅 田 彩 羽	大府市立大府南中学校	3
井 町 蒼 依	知多市立八幡中学校	3
長谷川 佑 美	知多市立知多中学校	3
渡 邊 市 椰	知多市立旭南中学校	3
内 田 憩 唯	知多市立東部中学校	3
河 合 夏 穂	阿久比町立阿久比中学校	3
武 田 夏 歩	東浦町立東浦中学校	3
今 田 一 花	東浦町立北部中学校	3
川 村 俊 輔	東浦町立西部中学校	3
坂 下 奈 々	南知多町立南知多中学校	3
塚 本 美 環	美浜町立河和中学校	3
都 筑 煌 士	美浜町立野間中学校	3
石 川 結 登	武豊町立武豊中学校	3
鈴 木 木 香	武豊町立富貴中学校	3
二 村 綾	岡崎市立甲山中学校	3
鎌 田 未奈萌	岡崎市立美川中学校	3
中 根 両 子	岡崎市立南中学校	3
寺 本 有 沙	岡崎市立竜海中学校	3
木 浦 咲	岡崎市立葵中学校	3
直 井 茉 央	岡崎市立城北中学校	3
山 下 菜 子	岡崎市立福岡中学校	3
鈴 木 桜 花	岡崎市立東海中学校	3
有 馬 紬	岡崎市立河合中学校	3
曾 我 穂乃香	岡崎市立常磐中学校	3
深 澤 英	岡崎市立岩津中学校	3
天 野 希 唯	岡崎市立矢作中学校	3
石 垣 心 菜	岡崎市立矢作北中学校	3

氏 名	学 校 名	学年
内 田 真 緒	岡崎市立新香山中学校	3
永 谷 琴 海	岡崎市立竜南中学校	3
岩 本 陽 花	岡崎市立北中学校	2
神 田 悠 樹	岡崎市立六ツ美北中学校	3
鈴 木 颯 真	岡崎市立額田中学校	3
市 川 夏 羽	岡崎市立翔南中学校	3
原 田 芽 依	碧南市立新川中学校	3
永 坂 実 那	碧南市立中央中学校	3
佐 藤 那 南	碧南市立南中学校	3
平 山 明 依	碧南市立東中学校	3
杉 浦 佑 衣	碧南市立西端中学校	3
古 謝 陽 向	刈谷市立刈谷南中学校	3
松 崎 香 蓮	刈谷市立富士松中学校	3
松 本 蒼 也	刈谷市立依佐美中学校	3
森 田 み と	刈谷市立朝日中学校	3
多比良 美 月	豊田市立崇化館中学校	3
水 野 愛 梨	豊田市立朝日丘中学校	3
板 倉 由 征	豊田市立豊南中学校	3
青 山 桃 香	豊田市立高橋中学校	3
山 元 那 菜	豊田市立上郷中学校	3
西 山 律 希	豊田市立高岡中学校	3
坂 本 歩 夢	豊田市立保見中学校	3
鈴 木 敢 大	豊田市立猿投中学校	3
小 林 彩 夏	豊田市立猿投台中学校	3
澤 田 琉 花	豊田市立石野中学校	3
中 泉 一 真	豊田市立松平中学校	3
植 村 茉 奈	豊田市立美里中学校	3
横 井 美 南	豊田市立逢妻中学校	3
田 中 晴 花	豊田市立若園中学校	3
川 田 美 咲	豊田市立梅坪台中学校	3
手 鴫 美 緒	豊田市立前林中学校	3
原 田 透 弥	豊田市立益富中学校	3
松 井 悠 希	豊田市立末野原中学校	3
磯 谷 香 穂	豊田市立井郷中学校	3
水 野 倖 雪	豊田市立藤岡中学校	3
秋 田 七 海	豊田市立小原中学校	3
北 野 杏花梨	豊田市立足助中学校	3
夏 目 果 歩	豊田市立下山中学校	3
土 山 公 輔	豊田市立稲武中学校	3
磯 村 美 結	豊田市立藤岡南中学校	3
渡 辺 彩 生	豊田市立浄水中学校	3
伊 藤 実佳子	安城市立安城南中学校	3
山 本 結美子	安城市立安城北中学校	3
内 山 美 月	安城市立明祥中学校	3
水 野 晴 喜	安城市立安城西中学校	3
渡 辺 菜 沙	安城市立桜井中学校	3
渥 美 海 珂	安城市立安祥中学校	3

氏 名	学 校 名	学年
春日井 詩 乃	安城市立篠目中学校	3
河 嶋 小源太	西尾市立西尾中学校	3
山 本 一 太	西尾市立平坂中学校	3
山 崎 晴	西尾市立寺津中学校	3
都 築 帆乃愛	西尾市立福地中学校	3
鈴 木 慎 司	西尾市立東部中学校	3
岡 村 雪 波	西尾市立一色中学校	3
尾 崎 帆 希	西尾市立吉良中学校	3
宮 田 眞 子	西尾市立幡豆中学校	3
千 田 咲 希	西尾市立佐久島しおさい学校	3
野々山 治 希	知立市立知立中学校	3
山 添 実 夏	知立市立竜北中学校	3
大 津 凜 音	知立市立知立南中学校	3
橋 本 み ゆ	高浜市立高浜中学校	3
酒 井 愛 菜	高浜市立南中学校	3
神 本 彩 音	みよし市立三好中学校	3
肌 附 奈 央	みよし市立北中学校	2
山 中 千 宙	みよし市立南中学校	3
林 希々羽	みよし市立三好丘中学校	3
鈴 木 花 帆	幸田町立幸田中学校	3
石 川 うるる	幸田町立南部中学校	3
馬 場 結 大	幸田町立北部中学校	3
浪 崎 彩 歌	豊橋市立青陵中学校	3
中 島 淳 貴	豊橋市立東陵中学校	2
南 島 一 心	豊橋市立羽田中学校	3
青 木 結 花	豊橋市立吉田方中学校	2
陶 山 万里愛	豊川市立東部中学校	3
平 尾 葵	豊川市立南部中学校	3
竹 内 愛 奈	豊川市立中部中学校	3
稲 田 湖 春	豊川市立西部中学校	3
浅 野 侑 菜	豊川市立代田中学校	3
荻 野 結 愛	豊川市立金屋中学校	3
青 山 丈太郎	豊川市立一宮中学校	3
笥 翠 月	豊川市立音羽中学校	3
黒 田 翔 楽	豊川市立小坂井中学校	3
坂 部 遼 太	蒲郡市立蒲郡中学校	3
平 野 露 花	蒲郡市立三谷中学校	3
大 畑 芽衣羅	蒲郡市立塩津中学校	3
杉 浦 莉 奈	蒲郡市立大塚中学校	3
尾 崎 璃 音	蒲郡市立形原中学校	3
岡 村 雨 音	蒲郡市立西浦中学校	3
小 田 紗 也	蒲郡市立中部中学校	3
松 下 愛 実	田原市立田原中学校	3
林 陽菜乃	田原市立赤羽根中学校	3
小 川 夢 歩	田原市立福江中学校	3
西 口 愛 空	新城市立千郷中学校	3
原 田 真 那	新城市立作手中学校	3

氏 名	学 校 名	学年
鈴 木 彩 笛	設楽町立設楽中学校	3
渡 辺 美 咲	東栄町立東栄中学校	3
金 指 実 花	豊根村立豊根中学校	3

〈 参 考 〉

「第47回少年の主張全国大会～わたしの主張 2025～」
内閣総理大臣賞受賞作品

伝える

(鳥取県) 鳥取市立桜ヶ丘中学校 3年

手を挙げた瞬間、みんなの息を吸う音が聞こえる。そして合唱が始まる。穏やかに始まった合唱が坂を登るように盛り上がっていく。僕はどんなふうに歌ってほしいかを、手で、そして全身で表現する。音楽が弾ける。僕が好きな瞬間のひとつだ。

僕は中学校で、合唱コンクールの指揮者を三度務めた。今年の曲は「心の瞳」。練習はまだ始まったばかりだ。

僕が指揮をするのは、口唇口蓋裂という病気の影響がある。僕の唇では、歌う時に上手に発音をすることができないが、指揮者なら、みんなの役に立つことができるからだ。

僕は生まれた時、唇と上の顎が裂けていた。このままでは、母親の乳を吸うことができずに死んでしまう。成長しても唇の隙間から息が漏れてうまく話すことができない。僕は、生まれてすぐに手術を行なった。

顎と唇の隙間は一応塞がったものの、鳥取の病院では、それ以上の対応はできなかった。両親が必死になって探した岡山の病院で、赤ちゃんの僕はまた手術を受けた。手術を何度も繰り返し、何年も通院を繰り返した。今でも年に一度、岡山に通っている。そのおかげで、今では食事を取ることでもできるし、会話することもできるようになっている。

しかし、人と話す時に心に引っ掛かりがあるのも事実だ。発音がしにくいので、僕の言葉がどう受け止められているのか、相手の表情を気にしながら話すこともある。実際、何度も聞き返されることや、発音のことをからかわれることがあった。何度も聞き返される時は、相手に対して申し訳ない気持ちになる。からかわれた時は、馬鹿にされたことに苛立ちを覚える。何を言っても無駄だと感じて諦めるときがある。

小さい頃、口元にマスクをつけた僕のことを、見知らぬ女性が「かわいいねえ」と言った。しかし、マスクをとった僕の口元を見た女性は、僕のことを「かわいそうな子」と言ったそうだ。「かわいい」と「かわいそう」。わずかな違いかもしれない。けれど母にとっては大きな違いだった。

谷 口 鉄 馬

「かわいそう」という言葉に、「不幸な子」という意味を感じたのかもしれない。母は「鉄馬は可哀想な子じゃない!」と強く言い返したという。

そんな母も、「こんな体で産んでしまってごめんね」と口にしたことがある。そのとき僕は「気にしてないし、大丈夫だで」としか返せなかったけれど、両親にとっても感謝しているのだ。この病気を治してくれるためにたくさんのことをしてもらった。歯の矯正をするにも、僕の場合は特別な処置が必要なので、岡山の歯科医に毎月通わせてもらっている。ほとんどの場合、父が送迎してくれる。こんなふうに、お金も、時間も、愛情もたくさんかけてくれた。僕の唇は、その証だから。

そんな僕が、中学一年生で合唱の指揮者になった。未経験のこの役割に強くひかれ、すぐ立候補した。実際にやってみると、どうやったら歌い手に的確に伝わるか、手で伝える面白さを知った。自分なりに指揮をアレンジして、どの部分をどう歌ってほしいのか、楽しみながら伝えることで、今までにない達成感を得られた。正しい発音は一つだけど、人を感動させる音楽は無限にある。僕は、僕の指揮でそれを表現できることに、言いようのない喜びを覚えた。指揮することで表現できる世界の広さは、僕が歌うことで表現できる世界を大きく飛び越えていった。

口唇口蓋裂の子供たちは、話すこと、表現することを躊躇しがちだ。でも、自分のことを伝えたい、表現したいと強く思っている。諦めずに伝えてほしい。言葉でも、それ以外でも、自分を表現する方法は、きっとある。伝えたい思いを受け止めあえたら、病気や障害、色々な違いにかかわらず、お互いの世界はもっと広がるはずだ。

今年の合唱曲「心の瞳」はこう始まる。「心の瞳で君を見つめれば、愛すること、それがどんなことだか、分かりかけてきた」

言葉で言えない胸の暖かさを、見つめ合うことで伝えるという詩だ。

伝わる。きっと伝わる。だから伝えることを諦めないでほしい。言葉でも、音楽でも、見つめ合うことでも、自分らしいやり方が、きっとあるはずだ。



4つの青少年育成県民運動

● 青少年の被害・非行防止に取り組む県民運動

－ 7月1日～8月31日

12月20日～1月10日

スローガン▶ ～非行の芽 はやめにつもう みな我が子～

● 青少年によい本をすすめる県民運動－10月1日～10月31日

スローガン▶ ～育てよう 豊かな心 読書から～

● 子ども・若者育成支援県民運動－11月1日～11月30日

スローガン▶ ～はぐくもう 自分らしく生きる子 愛知の子～

● 「家庭の日」県民運動－2月1日～2月28日

スローガン▶ ～親と子の 対話がつくる よい家庭～

令和7年度少年の主張愛知県大会 発 表 文 集

編集・発行 愛知県県民文化局県民生活部社会活動推進課

(<https://www.pref.aichi.jp/soshiki/syakaikatsudo/>)

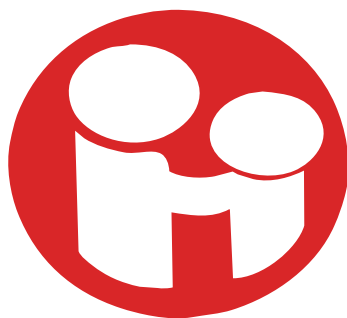
愛知県青少年育成県民会議

(<https://www.pref.aichi.jp/site/syakaikatsudo-kenminkaigi/>)

〒460-8501 名古屋市中区三の丸三丁目1番2号

電話(052)954-6175 (ダイヤルイン)

(注) 転載の際は、上記へご連絡ください。



(家庭の日のシンボルマーク)

毎月第3日曜日は
家庭の日



愛知県青少年育成推進キャラクター
「ゆうりい」

“ 親と子の 対話がつくる よい家庭 ”

— 明るく楽しい家庭づくりを —